
リトルバスターズ！ 雪の降る日には 前編

ユウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルバスターズ！ 雪の降る日には 前編

【Nコード】

N5689R

【作者名】

ユウ

【あらすじ】

リトルバスターズ！のSS

SSなのに前後編ww

沙耶はあやとして

佳奈多もリトルバスマンバー

みんなのルートをある程度進めて恋人にはならなかったって段階の話

（前書き）

リトバス！二次創作です

リトバスは会話ばっかになっちゃうぜ

雪の日のゾリオン大会の話です

シリ阿斯にはしたくないですがそついうところもあるのは仕方ない
のです

今年もそろそろ終わってしまっ、という12月の半ば。
僕達が住む町にも、今年初めての雪が降った。

雪の降る日には 前編

「第一回、リトルバスターズチキチキ雪原サバゲー大会〜！！勝者にはなんとあんな景品が・・・開催〜！」
恭介の熱烈なラブコールで朝早くに叩き起こされたリトルバスターズの面々は、グラウンドにて一人横断幕を広げて叫ぶ恭介の姿を目の当たりにした。

「何の真似だ恭介氏」

黒のロングコートを羽織った来ヶ谷さんが呆れ気味に恭介に尋ねる。
うわぁ、来ヶ谷さん恐ろしいほどに様になってるなぁ。まるで映画の敵国の女スパイみたいだ。

「何って、みんなで雪合戦しようぜって話だよ」

「誰もそんなことは訊いてないよ恭介・・・」

何言ってるんだお前らと言わんばかりの顔で答える恭介に一応突っ込んでおく。

「なぜこんな朝早くに呼出されて雪合戦をしなければいけないのか、一体何を考えているんだこの変態（21）コン。という意味で何の真似だと来ヶ谷さんは恭介さんに質問したんです」

「いやいやいや、そこまで言っていないと思うよ西園さん」

「うむ、流石は西園女史。今で私の言いたかった全てを理解してくれるとはな」

来ヶ谷さんはどや顔。っていうか合ってるんだ・・・

「うるせえぞお前ら！俺が（21）コンなのは関係ねえだろ！」

「認めたな」

「これは言い逃れできないね」
「全くだ」

真人と謙吾と三人でいつものような解説をしておく。

「おい待てよお前ら！俺は（２１）なんかじゃ・・・」

「あ、クド公と遊びたくてこんなこと考えたのか」

「なるほど、流石は（２１）コンだな」

「策士だね。孔明もビックリだよ」

「んなつ！いや、そんなことは・・・」

変に慌て始める恭介。

「うわあ、凶星だったんだ・・・」

「冗談で言っていたんだがな・・・」

「流石に引くぜ・・・」

「お、お前ら・・・」

僕らが一斉に白い目を向けると恭介は俯きながらわなわなと震え始めた。

「こんなのつてねえよ・・・」

「あの時みたいなこと言ってもダメだからね」

一応釘を刺しておく。

「ぐふっ・・・」

あ、崩れ落ちた。

「結局なんだったのだね彼は」

「（２１）コンじゃないでしょうか」

いい加減恭介が可哀そうになってきた。

「リキーはろっです」

あ、クドだ。

ものすごく眠そうに瞼を半分閉じている。というかその防寒着は小学生と間違われても仕方ないとおもうんだけど・・・

真っ赤な毛糸のコートに耳のところがウサギさんの形をしている耳宛をしている。

「萌え・・・」

来ヶ谷さんが色々と大変だ。

「恭介のターゲットが来たな」

「逃げとけ能美。恭介に食べられるぞ」

「わふゝ、リキ食べられちゃいますかゝ？」

「いや、大丈夫だと思うよ」

「そうですかゝ」

「棗×直枝・・・ありですね・・・」

「ないよっ!!」

にへらと気の抜けた顔をしたままクドがその場でフリーズ。

まだ寝ぼけてるんだ・・・

「ほう・・・」

こつちも来ヶ谷さんに負けず劣らず大変だ。

そつえば残りの人たちはどうしたんだろう。

「へへゝ、くらえーっ!! はるちゃんウルトラ投げーっ!!」

「ほわゝゝ、はるちゃんいたいよおゝ」

「棗鈴!! いつまで逃げ回っているつもりなんですの!!?」

「うつさいわぼけー!! こつちくんナ! 私はりきと雪だるまを作るんだ!!」

「なんですつてゝ!!? 理樹くんは私とかまくら作るんだから!!」

「こらあなた達! 直枝はこれから私と寮会の仕事があるんだから!!」

「なんだつてゝ!!?」

「なんですつてゝ!!?」

「うんがゝ!!?」

もう雪合戦が始まっていた!!

「おいしいのかアレ・・・」

「大丈夫なんじゃないのか?」

「おいお前ら、集合、集合ゝ!!!! いったんおちつけゝ!!」
いつの間にかダウンから立ち直った恭介が声を張り上げた。

『ゾリオン大会?』

一同声を揃える。

「そう、このおもちゃ、ゾリオンを使ってサバゲー大会をする」

恭介が全員にハンドガンの模型と黒い何かを渡す。

「それはセンサーだ。胸ポケットにでも入れといてくれ」

言われたとおり全員胸ポケットにセンサーを入れる。

「この銃、ゾリオンからは赤外線が発射される。それが体に当たるとセンサーが反応する仕組みだ」

「何気にハイテクだね」

「科学部お手製だ」

やっぱり・・・

「で、ルールはなんだ?」

謙吾が銃を弄びながら尋ねる。

「特になしだ。ゾリオンで撃たれたら退場。直接暴力つてのは・・・まあ分かるだろ?」

「まあいくらなんでもクド公を殴ったりはしねえよ」

「まあそりゃね・・・」

「それで?勝者の商品とは何なのかね?」

夢の世界から帰ってきた来ヶ谷さんが尋ねる。

確かにそれは重要なところだよな。

「ふふん、聞いて驚け・・・賞品はなんと・・・」

「なんと・・・?」

恭介が大きく息を吸い込む。

「理樹と一日デート権だ」

「な・・・」

『何だつてええええええええつ!?!?!?!?!?』

うわあ・・・みんなテンションがヤバイ・・・

「断然やる気上がっただろ?くじ引きでスタートポジションを決めたら7時からバトルスタートだ。リタイア情報などについては校内放送を使う。いいな?」

「いや、よくはないよ」

「ま、安心しろ理樹。お前が優勝したときは食堂一ヶ月無料券でもやるから」

二力つと笑う恭介。

いや、まあうれしいっちゃうれしいけどそう言う問題じゃない。

「それじゃくじ引いた奴からさっさと位置につけよ」

・・・どうしよう・・・

午前6時55分。

今僕がいるのは理科室。

ここはまあ当たりと考えていいだろう。

障害物は多いし人体模型やちよつとグロテスクなホルマリン漬けのものなんかを使えば西園さんやクドは戦わずに追い払えるはずだ。

実弾ではないのだから障害物でバリケードを組めば十分籠城できる。

「注意すべきは・・・」

まず恭介には要注意だ。このゲームの発案者なんだから特性やルールについては熟知しているだろう。

来ヶ谷さんも危険だな。よくマシンガンぶっ放してるし。

笹瀬川さんの運動神経も侮れない。

真人や謙吾も銃については詳しくないだろうが、銃を落とされたらどうしようもなくなってしまう。

あやちゃんも恭介の影響で何かと銃やらなんやらに詳しくたりするし・・・

あれー、コレは大ピンチなんじゃないかなー!?

強敵が多すぎるぞこれ!!

『始まるぜえ、リトルバスターズゾリオン大会!! 実況、解説はこの謎のパン屋アッキーと!』

『タキシード仮面がお送りしまーす・・・』

『おい小僧、テンション低いぞ舐めてんのか』

『実況は別にいいけどなんでコスプレまでしなきゃいけないーんだよ

！』

『いいじゃねーか、似合ってるぞ』

『嬉しくなあいつ！！！！』

『まあまあ、聞けよ小僧。これをちゃんとやってくれたら渚のモニ
ヨモニヨモニヨ・・・』

『・・・いやっほー！ーっうー！！ゾリオンサイコーッ！！！！』

うわ、実況まで付いてるんだ・・・というか渚のなんなんだろ。そ
もそも渚ってだれだろ。

『今５８分。開始まで丁度二分だ』

『俺らもやったよなーゾリオン』

『あの時は相打ちだったっけか？こんどはちゃんと決着をつけてー
な』

『もうやめとけよオッサン。年だろ？』

『なにおう？義理の息子に心配される程老いぼれちゃいねーよ』

『ぐわああゝゝやめろおつとさん』

『うわあゝ俺もやべえぞせがれよゝゝ』

『ぐおわあああああゝゝゝ・・・』

大丈夫なんだろうかこの実況・・・

『そんなことやってる間にもう十秒前だ。頑張れよガキども』

『スタートしたぜ親父』

『ぐおわあああつ！！』

始まったのか・・・

「どこですかリキは」

二階の廊下を歩いているのはクドリヤフカだ。

「きっと私は勝てないのでこのままリキと手を組んで一日いちゃい
ちやします！」

『既に勝利は考えていないんだな』 実況の声は基本聞こえません。

『まあ利口っちゃ利口だな』

「なっ！能美！？」

「わわあっ！恭介さん！！早速わたしははでっどおああらいぶの危機なのですっ！！」

『コイツは若干アレなのか？』

『ああ、アレが入ってるみたいだな』

「悪いな能美！」

「やられちゃいますです」

恭介が素早く銃を構える。

『これは恭介の勝ちだな』

『まあそりゃあ・・・いや待てアッキー！！』

『どうしたブシドー！！こ、これは・・・』

クドが大胆にこけていた。足をおっ広げて。

「や・・・」

「ど、どうなっただんですかこれは！！上下左右がわかりません！！」

「ヤツクデカルチャー！！！」

恭介が盛大に鼻血を吹いて倒れた。

まあこの学校のスカートは短いわけでそれでこけて足をおっ広げていたら中身が見えてしまうわけで恭介は（２１）コンなわけで・・・

「あれ？恭介さんはどうして倒れているんですか？」

「く、くまさん・・・」

「まあよくわかりませんがお前の命頂くぞです！！」

クドが恭介の胸に銃を当て、躊躇うことなく引き金を引いた。

『まさか恭介が一番目の脱落者になるとはな・・・』

『（２１）コン故の定めなんだろうな・・・』

『マイクはいりました。えー、二階渡り廊下にて、棗恭介が脱落』

『みんなパンツには気をつけとけよ』

『いやおっさん、パンツは関係ないんじゃないか？』

「恭介が脱落？一体どういうことだ？」
体育館には真人の姿。

「恭介と同格かそれ以上の奴にやられたってことか・・・となると居そうなのは理樹かあや、来ヶ谷ってところか？あんまり近づきたくはねえな・・・」

『なるほど、コイツ馬鹿だが察しはいいみたいだな』

『春原みたいなタイプだな。まあ読みは外してるけど』

『いやまあ普通クドにやられたとは考えないだろ』

取り敢えず動かないことには始まらない。

そう思い俺は用心して体育館の外へと出る。

「誰もいない、か・・・」

周囲に気を配りつつゆつくりと歩みを進める。

『あれ？コイツ普通に強いんじゃないのか？』

『まあ理樹の話によると最近はメタルギアにはまっているらしいからな』

「ん？」

真人が目にしたのはトレーニング室。

「ほう、トレーニング室か」

躊躇うことなく入室。

「ん？なんだこれ？」

入り口近くのサンドバックに何かが貼られている。

『これはゴリラが三万回殴っても壊れなかったサンドバックだ。お前に壊せるもんなら壊してみるばーか』

「なるほど、俺に喧嘩売ってんだな・・・いいだろう」

ふらり、とサンドバックの前に立つ。

「買ってやんぜえつつつ！！！！」

勢い良くサンドバックをぶん殴る。

モチロンゴリラが三万回殴って壊れないようなサンドバックではないので真人の全力パンチによって完全に崩れ去ってしまう。

「はっ！！この程度で俺を負かそうなんざ甘えんだよ！！」

真人が勝利を確信したとき、ひゅんと風を切る音が響く。

そして・・・

「ぐおえあつ!？」

真人の体が別のサンドバックに勢い良く吹っ飛ばされた。

「んまつ・・・つぁ・・・ちよぎつ!」

「一体なにがあつたんだ？」

「真人がサンドバックを殴ったことにより、仕込んであつたギリギリまで締め上げたサンドバックのため糸が外れ勢い良くサンドバックが飛んできたんだな」

「恐ろしい兵器だな・・・俺達の時あんなことしでかす奴いたか？」

「いや、居なかった。恐ろしい集団だなリトルバスターズ・・・」

「わるいな真人・・・」

後ろから一人の人間の影。

「りきとでーとするのはあたしだ」

大きな鈴を頭につけたポニーテール。

こんな髪をしている奴は一人しか居ない。

「鈴か」

「恐ろしいチビツ子だな」

「おい、ころすぞおまえら」

「なっ、マイク入ってたか!？」

「いや、入ってないぞ!！」

「まあいい。りき、あのときの作戦少し使わせてもらったぞ・・・」
パン、と乾いた音が響く。

「あー、マイクコレで入ったのか?トレーニング室にて井ノ原真人が脱落」

「筋肉筋肉」。いやっほーうつ!！筋肉旋風だ!！」

「あの馬鹿やられたのか」

武道場には謙吾。

コレは当たりだったな。

木刀をいち早く手に入れることが出来た。

まあ防具をつけてもいいんだが・・・流石にそれはずるいな。

しかしこれからどう動くべきか。

確実に理樹とのデート権を手に入れるならある程度みんなを消耗させた上で一気に叩くべきだ。

だがこのまま籠城するとなるとここでは厳しいだろう。

なにせここは障害物や逃げ場が少ない。

早めに移動して別の策を練るべきだな・・・

「あつ、謙吾くんはっけーん!!」

「ちっ、三枝か!」

入り口に現れた三枝は俺を確認するなり銃を乱射してくる。

「くっ!」

取り敢えず防具を置いてある場所に隠れる。

「あー謙吾くんずるーい!」

「ずるいものか。防具をつけないだけマシだと思え」

『確かにそうだな』

『男前だなコイツ』

「しかしどうしたものか・・・」

出口は一箇所。

それは三枝に塞がれている。

「参ったな・・・」

「へっへーん!はるちゃんは頭がいいのでここから動かないことにしましたよー!」

流石にばれたか・・・

「まあ待て三枝。少し落ち着け」

「どうしたの?私はものすごく落ち着いてますヨ」

「実はな三枝。この更衣室の俺のロッカーになんと理樹から借りたタオルが入っているんだ。

「なんだってー!!ってどうせ謙吾くんが使ってるんでしょ?」

「安心しろ、俺が捻挫した時保冷剤を巻きつけるために使ったんだ」

「と、ということとはつまり・・・」

「もちろん未使用だ」

「な、なんだってー！？」

よし！食いついた！！

「ちよつと更衣室にワナがないか調べてくるネー！！」
チヨロイもんよ。

「理樹くんのタオル」

謙吾くんのロッカーを見つける。

「あつた！」

駆け寄って勢い良く開け放つ。

「ほほう理樹くん、なかなか派手なタオル使ってますネ」
ロッカーのなかには真っ赤なタオル。

広げてみるとそこには・・・

「筋・・・肉・・・？」

「悪いな三枝。俺の勝ちだ」

「へっ！？」

振り返った葉留佳の胸を謙吾の銃から放たれた閃光が貫く。

「そんなあ、騙されたうえにやられるなんてえっ」

「なかなかちゃんとした戦いだっただな」

「三枝が若干アレだったってだけだったな」

「はいマイク入りました」。武道場にて三枝葉留佳が脱落」

『己の欲望に実直でした』

「ほう、葉留佳くんがやられたか」

図書室には来ヶ谷の姿。

まあここはどうなんだろうな。

一応グラウンドを見下ろすことは出来るが手元のハンドガンではこの距離に対応できない。

「うむ、ここはグラウンドを傍観しつつ素直に籠城といくか」

図書室のドアは一箇所しかない上に開くときに大きな音がするから後ろを取られる心配はない。

「しかし今日は寒いな・・・」

それもそうだ。雪が降ったのだから。

彼は私が寒いと言ったら暖めてくれるのだろうか。

私のことを好きだと言ってくれた彼はもう居ない。

だけど、もし一日デートなんて簡単なことであのときの彼に戻ってくれるなら。

あの日々を取り戻せるなら・・・

「絶対に負けられんな・・・」

『すごいシリアスだな』

『なにかただならぬ過去があっただろうな』

「うるさいぞファツキンだんごども。死にたいのか」

『なあ！？なんであいつらマイク入ってないのに聞こえるときがあるんだ？』

『知るかよ！なんか超能力とか使えるんじゃないのか？』

「はあ・・・」

まあゆつくりさせてもらおうでしょう。

カーテンの裏に隠れる。

「だれかいますか？」

来た。

というか訊かれて答える奴がいるのか？

この声は美魚くんか・・・

「誰もいないようですね・・・」

気づいていないか。

「図書室ですね・・・」

彼女は一つの本棚に近寄る。

純文学のコーナーだ。

「あの人は・・・この詩のことくらい覚えていいるのでしょうか・・・」

「あれは・・・詩集？」

「私や美鳥のことを覚えていなくても・・・この詩のことを覚えていてくれたなら・・・」

彼女は文庫サイズの本を胸に押し当てる。

ああ、何かそんなことがあった気がするような気がするなあ・・・
彼は誰かの善意を信じ続けていてくれたような気がする。

その誰かは果たして救われたのだろうか。私はよく覚えていない。
目を閉じて物思いに耽っている彼女の後ろを取る。

「銃を捨てる。両手を頭の上に置きこちらを向け」
銃を彼女の胸の辺りで構える。

「・・・来ヶ谷さんですか」

本と銃を足元に置き、頭の上に手を置いてからこちらを向く。

「悪いね美魚くん。私は負けられないのだよ」

「そうですね、私を負けたくはありません。でも私の力ではあなた達には敵いません」

「諦めるのか？」

「諦めはしません。今日のところは諦めますけど」

「そうか、なるほどな」

「それに私は、直枝さんが私と彼女を救ってくれたことだけで十分ですから」

「君は・・・強いな」

「私は強くありません。直枝さんが、私を支えてくれたんです。弱かった私を」

「そうか、君もそうだったんだな。」

「ならば、今日のところは私の勝ち、ということでもいいのかな？」

「はい、でも次は負けませんよ」

「ふふ・・・せいぜい頑張ってくれたまえ」

ゆっくりと引き金を引いた。

『なんか重かったな』

『まあ仕方ないだろ。えーとマイク入りました。西園美魚が図書室にて脱落』

『お前ら後悔はしねえようにな』

「西園さんやられたのね」

「図書室って西園さんらしいですわね」

「図書室って結構死角とか多いし穴場なのよね。来ヶ谷さんとかにとられてなければいいけど・・・」

食堂にて、二木、笹瀬川、朱鷺戸の三人の姿。

こちらは完全に三竦みの戦いに陥っていた。

どうしたものでしょうか・・・

私は落ち着いて考える。

この二人、どちらも運動神経は抜群。二木さんに至っては熱を出していたにも関わらず校内マラソンで一位をとったことが最近発覚。この根性は侮れない。

朱鷺戸さんは幼い頃から恭介さん達と一緒にいたというだけあっておかしなことにやたら詳しい。

私が朱鷺戸さんを狙い、朱鷺戸さんが二木さんを狙い、二木さんが私を狙っている。

二人とも頭がいい。先に動いた者が無駄死になるということは理解できているのだろう。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

ら、埒があきませんわ・・・

「ねえ朱鷺戸さん？」

「何かしら二木さん？」

二木さんが口を開く。

「あなたはこういう風に直枝と出会ったの？」
「ぶっ！！」

なるほど、隙が出来た朱鷺戸さんを私がに撃たせようと思ったのだろつ。

ふふんその手には乗りませんよ。

二木さんがとても小さく舌打ちをする。

「どうだったのかしら？」

「え、えーとその。私はそのえーと・・・」

うわ、朱鷺戸さん可愛いですね。真っ赤になってる。これで直枝さんの幼馴染って・・・

もしかして不味いんじゃないでしょうか？

「え、と・・・日本に帰ってきたとき初めてあたしに声をかけてくれたのが理樹くん・・・それからリトルバスターズのみんなが仲良くしてくれて・・・」

「仲良いんですね」

「そ、そんな仲良いだなんてっ」

『なあオッサン、なんで女子会が始まったんだ？』

『俺に訊くなお前のダチに訊けばいいだろ』

『ああそつだな、今度杏辺りに訊いてみるか』

「そ、そういうあなたはどうかだったのよー！？」

「ああ、私？廊下で擦れ違った」

「雑ー！！」

「なによー！？擦れ違ったとき何か通じ合ったりしたのかもしれないでしょう？」

「でも流石に擦れ違っただけで気になったりはしないんでしょう？」

「いやーまあちよつと綺麗な顔の子だなーとか葉留佳はあんなイケメンに囲まれてるのかーとか思ったりはしたんだけどね？」

「面食いんですね」

「んなっ！？失礼ね！じゃああなたはどうかなのー！！」

「そうですね、初めて会ったときは特になんとも思いませんでしたし、宮沢さんの近くにいる殿方ってくらいの認識だったんですけど・・・その、わたくしに大切なことを教えてくれたというか、憧れの人と好きな人というのは違うのだということを教えてくれたというか・・・」

「いつ初恋暴露大会になったのこれ？」

「私に訊かないですよ」

「んなっ！謀りましたわね！？」

ついカツとなる。

「いや、あなたが勝手に話し始めたんじゃない」

「う、うるさいですわねーっ！こくなったらあなた達の話も訊かせて貰いますわよー！」

「はあっ！？なんでそうなるの？意味わかんないんですけどー！」

「そうよ、あなたが自爆しただけでしょ？」

「いいのかしら二木さん？わたくしがここで銃を降ろせばあなたの負けですわよ？」

意地悪な意味を浮かべる。

「なっ、そんなことしたらあなたも・・・」

「死なばもろとも、ですわ」

「つ~~~~っ・・・」

二木さんは目を思い切り瞑る。そして。

「いいわよ、やってやろうじゃない！」

彼女の中で一体どれだけの葛藤があったのでしょうか。

「そうね、まあちゃんと話したのは彼が寮会にやってきたときかしら？」

「そういえば寮長さんでしたわね、あなたと直枝さん」

「ええ。最初は私もツンツンしてたし直枝も仕方なく来てるって感じだったから長くは続かないんだろうなって思ってたんだけど、直枝がその・・・優しいから・・・」

「きやーはずかしー」

「うるさいわよ朱鷺戸さんー！」

「まあまあ落ち着いてくださいませ」

「まったく。まあそれで直枝に色々と助けられて、勿論あなた達にも助けられて・・・そうね、なんとも思ってた人がいつの間にか私の中で大きな存在になっていたってところね」

「その辺りはわたくしと少し似ていますわね」

「そうね。私の方がかなり助けられてるでしょうけど」

「あらあら、そんなはずないでしょう。わたくしは大事な家族ことまで救ってもらったんですから」

「それなら私だって葉留佳を救ってもらったわよ」

二人でにらみ合う。

「じゃあ最後は朱鷺戸さんですわね」

「やつぱりあたしも・・・？」

「もちろん（ですわ）」

はあ、と溜息をつき少し肩を落とす。

「あたしはー、そうだなあ。たくさん輝きを十分すぎるほどにくれた人？」

「どういうことよ」

「そういう抽象的なことではなくてちゃんと話してくださいませ」

『そんな死んであの世界に行ってタイムマシンで過去に戻って出会ったと言えるわけないでしょーっ！！！！』

「えーっと・・・土砂崩れに巻き込まれて死にかけてたところを助けて貰った？」

うん、間違っではない。

「・・・」

「・・・」

「あれ？なんでみんな黙っちゃったの？」

「いや、その・・・」

「辛いこと思い出させてしまっでごめんなさい・・・」

「い、いやいいのよ！？あたしもそんなつもりで言っただ訳じゃないし！それにそのなんというかその、小さい頃は世界を転々としてたからろくに友達は居なかったし」

「うっ」

「学校とかにもろくに行けた事はなかったし」

「うっ」

「銃とか向けられたときは真剣に不味いと思ったし・・・」

「・・・」

「なんかもう、どうでもいいや・・・」
「「ごめんなさい・・・」」

結局三人で固まってしまう。

『あれ？まだ続くのかこれ？』

『変なフェードアウトで終わったな』

『今生き残ってるのは・・・』

・直枝理樹

・神北小毬

・棗鈴

・宮沢謙吾

・来ヶ谷唯湖

・能美クドリヤフカ

・笹瀬川佐々美

・二木佳奈多

・朱鷺戸あや

脱落者が

・棗恭介

・井ノ原真人

・西園美魚

・三枝葉留佳

つてとこか』

『とりあえず前半戦は終了だな。後半はもっと激しくいこうか』

『なに企んでんだオッサン？』

『秘密だ』

（後書き）

前半はとりあえず終了です

とりあえず半分は脱落させるところまで進めようと思ったんですが
長すぎたのでこの辺りで勘弁してください

読んでくれた方は感想かいてくれたらうれしいです！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5689r/>

リトルバスターズ！ 雪の降る日には 前編

2011年7月3日01時49分発行